

授業探訪

総合系科目・多彩な学び<文化を生きる—「池袋学」入門>

池袋のことなんて知らなかった

全学共通科目兼任講師 後藤 隆基

池袋のことなんて、何も知らなかった。

21世紀最初の春に立教大学の門をくぐった私は、お世辞にも真面目とはいえない学生だった。授業の出席率はお粗末も甚だしく、サークルにも入っていなかったから、大学にいる時間も短かった。いったい何をしていたんだろう……と、我が事ながら呆れるが、どうも記憶が曖昧で致し方ない。長らく西武池袋線の椎名町駅のそばに住んでいたため、通学は基本的に徒歩か自転車。池袋の街に近づく機会はほとんどなく、地域に対する知識も興味も持っていなかった。石田衣良の小説『池袋ウエストゲートパーク』が宮藤官九郎の脚本でドラマ化された頃で、たまに用事があって池袋駅へ行くときは、小心を押し隠しながら、チーマーだのカラーギャングだのと呼ばれるコワそうなオニイサンたちを横目に池袋西口公園を通り過ぎたものだった。

数少ない街との接点を探るとすれば、東京芸術劇場だろうか。文学部日本文学科（現・文学部日本文学専修）で、漠然と演劇について勉強しようかと思っており、観劇のために時々足を運んでいた。しかし、あの頃の東京芸術劇場は、現在のように開放的な雰囲気ではなく、重苦しい扉に閉ざされた要塞のようにも感じられ、あまり好きになれなかった。むしろ、昼間から池袋演芸場でぼんやり高座を眺めたり、新文芸坐で古い映画を観たりしていたことのほうが懐かしく思い出される。

どうにか学部を卒業して大学院に進学した。相変わらず立教界隈をうろろろしていたものの、特に池袋への関心は生まれなかった。ただ、先生方や先輩たちに連れられ、池袋の小さな飲み屋に行く機会が増えた。自分では知りえなかった店を教えてもらい、時々ちょっと背伸びして、ひとり暖簾をくぐってみることは、楽しかった。

しかし、それが「池袋」である必要は、なかったのかもしれない。

「池袋」のことが気になり出したのは、立教に入って10年以上が過ぎてからだ。

大学院の博士後期課程在学中、2011年4月から、学内のESD研究センター（2012年度からESD研究所と改称）で勤務することになった。折しもその年に、東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）と立教大学（学校法人立教学院）との間で包括的な連携協定が締結された。当初、具体的な事業内容は未定だったようだが、池袋西口にある二つの機関がつながるまたとないチャンスであり、何かできないかと、誰に頼まれたわけでもないのに考えていた。そこで、ESD研究センターの先生方などにも相談し、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）が重視するサステナビリティ（持続可能性）の観点から、地域との連携を目指す大学と、

地域文化を発信する公共劇場との結節点を探るべく、まずは双方の共通地盤としての池袋西口を視座に据え、大学・劇場という二者を軸に、地域も巻き込む形での有機的なパートナーシップの可能性を検討するシンポジウムを企画・実施した。

池袋西口の公共劇場と私立大学が手を組むことで地域文化の醸成にどのような役割を担うのか。その方途を考えるため、東京芸術劇場、立教大学総長室教学連携課（現・社会連携教育課）、そして池袋西口の地域づくりを先導してきたNPO 法人ゼファー池袋まちづくりなどと協働し、東京芸術劇場と立教大学による連携講座「池袋学」（2014～2017年度）を実施することになった。開講に至る経緯や講座の詳細等については、拙稿「都市における地域学としての『池袋学』の可能性（一）——立教大学と東京芸術劇場による地域連携の実践」（『大衆文化』第15号、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、2016年12月）にまとめたので、ご興味のある方は参照されたい。

こうしたいわゆる〈地域学／地元学〉は全国各地で数多展開されているが、中心的役割を担う研究者や関係者の専門性によって、性格や方向性が大きく左右される。「池袋学」では初代座長を江戸文学研究者の渡辺憲司氏（当時・立教新座中学校・高等学校校長、立教大学名誉教授。現・自由学園最高学部長）が務め、主に歴史や文化といった視座から「池袋」を考えることになった。2016年度からは環境教育／ESD研究者の阿部治氏（立教大学社会学部教授、同ESD研究所所長）が座長の任に就いた。

2014年度から3年間の予定ではじまった「池袋学」は、ありがたいことに関係者内外の存続を求める声を受け、1年延長、2017年度を総括年度として計4年間にわたる活動にいったん幕を下ろした。

*

ずいぶん前置きが長くなってしまった。ただ、全学共通科目「文化を生きる—『池袋学』入門」の開講に際し、前提として、私自身の池袋との関わりや東京芸術劇場と立教大学による連携講座「池袋学」の存在が不可分であるため、お許しいただきたい。

「池袋学」は4年間で25回の講座を実施したが、残念ながら、参加者に立教大学の学生はほとんど見られなかった。学生に池袋を知ってもらい、考えてもらう機会をつくるためには、このテーマを大学のカリキュラムに組み込む必要があるのではないかと感じるようになった。しかし、関係する専任教員は多忙を極め、新たな実践は難しい。そこで、当時私が兼任講師として担当する機会を与えられていた全学共通科目「文化を生きる」で「『池袋学』入門」と題した授業を行うことにしたのだった。

2017年度からこのテーマを取り上げようと考えた理由は、先に述べた「池袋学」をカリキュラムに組み込みたい、という思いのほか、2点。一つは、2017年度で「池袋学」が一区切りと決まっていたこと。もう一つは、翌年に立教大学の池袋キャンパス移転100年を控えていたことである（そして2018年度には移転100年の節目を迎えた）。こうした時節を機に、学生が、けっして短くない4年（あるいはそれ以上）の時間を過ごす池袋という場所について、少しでも思いを馳せる時間があってもいいのではないかと思ったのである（ただのおせっかい、ともいえる）。

1918年（大正7）に築地から池袋に移ってきた立教大学は、文字どおり、池袋の街とともに発展してきたといって過言ではない。関東大震災後の都市復興の中で池袋も市街地化が進行し、それと歩調を合わせるように、1922年（大正11）には400名に満たなかった立教大学の学生が、1931年（昭和6）には1300名に増加したという。当時の『立教大学新聞』（1931年11月9日付）にこんな記事が載っている。

現在は帝都北西の交通の中心地として最高学府の存在する商業地として、また保健上の適地としてその頃〔1922年—引用者注。以下同〕より市内外からの移住者が多く数年の内に現在の大をなした。／〔中略〕今池袋の人達に対して池袋の名前を問へば即座に立教大学を答へられるであらう。〔中略〕漸次総合大学の機運に向ひし暁は池袋町民の誇りはより輝くであらう。（武藤武雄「輝く立教と池袋」）

「立教と池袋との不可分な誼は将来益々その実を高め、両者共栄の本業を尽すべきである」（同前）という意識は、いささか大仰に思えるかもしれないが、池袋という地域と立教大学の（初期段階における）関係性を示す言表として注目されてよい。

これ以降の池袋と立教大学の関係はどう変化していったのか。そのあたりの動きは、雑誌『東京人』の「豊島区を楽しむ本」（2012年11月増刊号）に、地域と大学の関係について寄稿する機会を得、学内外のさまざまな方へのインタビューを行ったが、そこから学ぶことは、じつに多かった。

そうした種々の体験を通して、学生時代にはまったくと言っていいほど興味がなかった池袋が、少しずつ身近な場所になり、街の人に出会い、関係を構築していく中で、そこはかとなない愛着のようなものも芽生えてきた。

街を知る——池袋を知る、ということに関して、たぶん、きっかけがなかったのかもしれない。どこが入口なのか、分からなかったし、見えなかった。私が『『池袋学』入門』なる講義をはじめようと思ったのは、池袋に興味はあるけれど、どうしたらいいかわからないという学生がもしもいるのなら、彼／彼女たちに、小さくてもいい、何か〈窓〉を示したかったからにほかならない。全学共通科目のため、全学年・全学部の学生に受講の機会があることも、ありがたかった。

*

本科目は、2017年度と2018年度（いずれも秋学期）ともに300名前後の履修者を数えた。講義内容は後掲のシラバスをご覧ください。一目瞭然だが、私自身の専門分野を含む近世から現代までの文化史に関する話題に比重を置いている。

中でも、特に意識したのは、近年、再開発などにより、どんどん表層はきれいになっている池袋の、裏側や底に隠れた記憶も伝えたい、ということだ。

例えば、1978年にサンシャインシティが竣工した池袋東口の広大な敷地は、かつて東京拘置所（巣鴨プリズン）だった。今では、すぐ脇の東池袋中央公園の一角に、この地で処刑された人びとを慰霊すべく造立された小さな「平和の碑」から、逝きし世の名

残を想像するしかない。東条英機をはじめとする〈戦犯〉が拘置され、処刑された空間が「サンシャイン（＝太陽の光）」によってその暗部をかき消されてしまったように思うのは、所詮後代を生きる外部者の感傷だろうか。巨大なビルを墓石とみる人もいよう。あるいは、この数年で環境が整備され、明るい空間に変貌を遂げた南池袋公園にも城北大空襲（1945年4月13日）の犠牲者が埋葬され、死者を弔う「豊島区空襲犠牲者哀悼の碑」がある。戦後の記憶ということでは、敗戦直後の数年間、池袋の東西に、いずれも短命に終わったが、当時としては極めて前衛的な小劇場——東口のアバンギャルド、西口の池袋文化劇場——があった。歴史の影でひそやかに埋葬されてきた事象は枚挙に遑がない。

加えて、ゲスト・スピーカーをお招きし、私には語るができないテーマの講義をしていただけたことも幸いであった。2017年度には「池袋学」初代座長の渡辺憲司氏に、近世から近代へと連なる日蓮宗やキリスト教に基づく〈女性へのやさしさ〉を底流に混えた雑司が谷地域の力を、NPO法人ゼファー池袋まちづくり理事長の小林俊史氏に、地域からのまなざしで池袋を見ること／街をつくることの重要性を示唆していただいた。2018年度には、立教大学国際センター職員の藤枝聡氏に多文化共生・国際化・立教の地域連携等について、立教サービスラーニング（RSL）センター教育研究コーディネーターの福原充氏に自由学園を軸とする池袋の大正自由教育についてご講義いただいた。どの回も私の授業以上に（！）好評を博し、より多角的な「池袋」への考察の導きとなった。

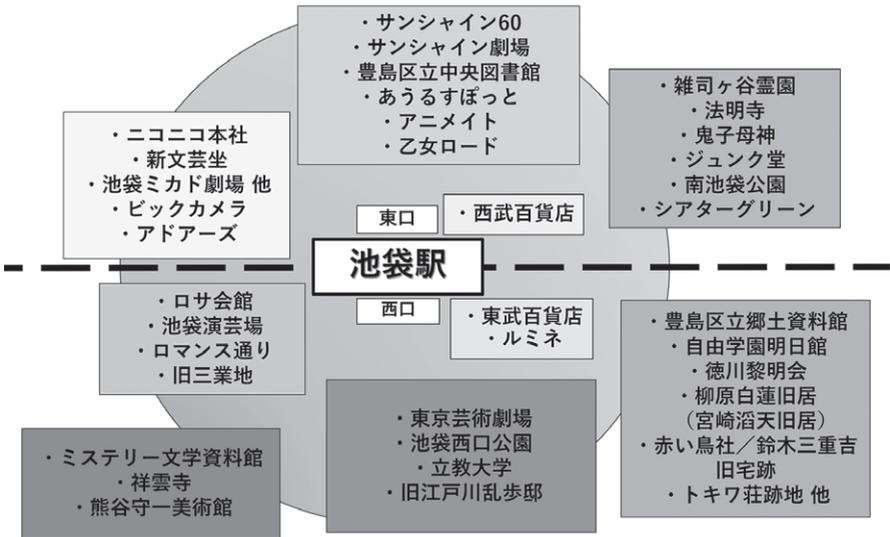
また大教室での多人数での講義ということもあり、どうしても歴史や文化に関する座学に偏りがちなのだが、学生の身近な〈いま・ここ〉を実感してもらうべく、Google Mapを用いて、立教大学を起点とする〈池袋仮想散歩〉を行ったことも学生にとっては刺戟になったようだ。その際、NPO法人「としまの記憶」をつなぐ会が豊島区のオーラルヒストリーをまとめて制作した動画アーカイブ（<http://movie.toshima-kioku.jp>）を併せて活用し、例えば、旧江戸川乱歩邸の紹介とともに乱歩のご令孫である平井憲太郎氏のインタビューを見てもらったり、駅前にかつて存在したヤミ市の解説をしながら当時を知る人の証言を聞いてもらったり、土地の記憶に奥行きをもたせる工夫を施した。

2017年度には、受講者から有志を募り、実際に池袋の街を散策する企画を実施した。成績にも評価にもまったく関わらない自由参加だったが、8名の申し込み（1名は事情により当日欠席）があり、このときは自由学園の渡辺憲司氏のご厚意に与り、自由学園最高学部との連携企画として自由学園の学生7名も参加、学生同士の交流も図ることができた。フィールドワークによって、座学や仮想散歩では分からない体感的な池袋を味わってもらえたようだ。2018年度は日程調整等の都合で実施が叶わなかったが、次年度以降、機会を設けたいと考えている。

*

池袋のことなんて何も知らなかった私が、立教に入って池袋に興味を持ち始めるま

でに約 10 年を要したわけだが、現在の私の目に映る池袋の風景（イメージ）を大雑把な図にすると、以下のようなものになる。



池袋の特徴は〈雑多性〉といわれる。その〈雑多性〉とはいかなるものか。池袋は、駅を中心に東西に二分化されて語られるきらいがあるが、私にとっては、単純な東西の二項対立ではない、駅を軸に円形のグラデーションを描くように、場所によって異なる文化的相貌を見せてくれる街だ。

いわずもものことだが、みんながこのように見えるとは思わないし、見てほしいとも思わない。もしも、受講者の一人ひとりが、それぞれに異なる池袋のイメージを描いてくれたなら、本科目を開講していることの何よりの意義になるだろう。むしろ私が知らない池袋の姿を、リアクションペーパーなどを通して学生から教えてもらえるとき、喜びを感じる。

あなたには、池袋がどんな場所に見えるか？ あなたにとって池袋はどんな場所か？ それを知りたいし、教えてほしい、そう思うのだ。

ごとう りゅうき

Syllabus

文化を生きる

授業の目標

Course Objectives

1918年(大正7)に立教大学が築地から池袋にキャンパスを移転して今年で100年。大学が位置する池袋(豊島区)の歴史や文化等を学び、自分が日々通っている地域についての理解を深める。

授業の内容

Course Contents

郊外の地であった池袋に現在の山手線の駅が開設されたのが1903年(明治36)。その後、関東大震災や戦災などを経て、しだいに都市化し、今や副都心の一角を占めるまでに発展した。本授業では、池袋(豊島区)の歴史的・文化的資源に焦点を当て、いくつかの事例について学ぶ。自分たちがどのような場所で学生生活を送っているのかを知り、地域への関心と理解を深める契機としたい。

授業計画

Course Schedule

1. イントロダクション:「池袋学」について
2. 「池袋の女」という怪奇譚
3. 雑司が谷と『赤い鳥』文化圏
4. 池袋モンバルナスと小熊秀雄と沖縄
5. 立教大学の隣に住んでいた江戸川乱歩
6. ヤミ市からの復興
7. 知られざる戦後池袋の小劇場演劇
8. トキワ荘に集う漫画家たち
9. 池袋をうたう:青江美奈「夜の池袋」
10. 堤清二と西武百貨店とセゾン文化
11. 『池袋ウエストゲートパーク』を読む／観る
12. 現代演劇地図における池袋の位置
13. 文化創造都市としての豊島区
14. まとめ:池袋文化の未来